

いわきの小学校で「心の中の太陽」描く

被災地支援 アートのワークショップ

再生可能エネルギーを題材にした「コミュニケーションアート」と名付けられた絵を描くユニークなワークショップが2月、東日本大震災の被災地で東京電力福島第1原子力発電所から半径30km圏近くにある福島県いわき市の小学校で行われた。通信販売型自動車保険のソニー損害保険（東京都大田区）が、再生可能エネルギーの普及啓発や環境教育活動を行うNPO法人（特定非営利活動法人）そらべあ基金（千代田区）などと協同で、被災地の子供たちを応援しようと開催した。

ワークショップが行われたのは、いわき市立久之浜第一小学校（松本光司校長、児童数190人）。「さまざまなエネルギー問題を理解し、改善に向けて行動できる子供の育成」を教育方針の一つに掲げ、環境教育に熱心な学校だ。震災では、津波や地震による被害を出した地区にあり、原発事故に伴う避難指示が出たため昨年10月まで別の学校の校舎を借りするなど児童らは不自由な生活を強いられてきた。

2月22日に行われたワークショップには、6年生全2学級の児童44人全員と担任教諭が参加。そらべあ基金の市瀬慎太郎代表理事（45）による太陽光発電など自然エネルギーに関する映像を使った授業の後、各学級に分かれ「わたしの心の中の太陽」をテーマにしたコミュニケーションアートに臨んだ。

コミュニケーションアートと



作品を手に記念撮影

は、絵の上手、下手を競うものではなく、自分の思いや考えを絵にして表現することで感性や創造性を育てるとともに、互いの絵を鑑賞することで自由な発言や意見交換を活発化させるための手法。プログラムを作成、運用するNPO法人「インスティテュート・オブ・コミュニケーション・アート（IOCA）」（港区）の谷澤邦彦代表理事（49）らスタッフが指導にあたった。

児童は、25cm四方の色紙12種類の中から好きな1色を選び、パステルを使って紙の上に指で色をのぼしながら、イメージする「心の中の太陽」を約30分かけて作品に仕立てていった。完成後は、児童同士で作品を鑑賞。感じたことを付箋紙に記入し、各作品の前に張っていき、スタッフが一つ一つ発表して、描いた児童本人が付けた題名と照らし合わせていくと、作品ご

とに歓声があがった。

自宅が津波の被害に遭い、今も避難生活を送っている1組の菜花友紀君（12）は「指で描くのは初めてで楽しかった。みんなの感想が自分の思っている感じと同じだったのでよかった」と笑顔で話した。

今回のワークショップは卒業制作も兼ねており、額装して持ち帰った各自の作品とは別に、卒業式までに作品すべてを1枚のポスターにデザインし、参加児童と学校に贈られる。

1組担任の大和田まひる教諭は「子供たちが自分のことを見つめる機会はなかなかなく、中学進学を前に貴重な経験をさせることができました。絵に臨む集中力は高く、震災後に多くのことを乗り越えてきた子供たちだからこそ、自分としっかり向き合うことができたのだと思います」とほおを緩ませた。

ソニー損保広報・CSR部の



「心の中の太陽」を描く児童ら＝2月22日、福島県いわき市の久之浜第一小学校

渡辺洋部長（54）は「作品を手に全員で記念撮影するときの笑い顔から子供たちの達成感が伝わってきました。弊社としては初の試みでしたが、社会貢献活動の中で被災地支援という考え方は今後も忘れてはならないと実感しました」と語った。



ソニー損保 ソーラーパネル贈る活動サポート

ソニー損保はこれまで、そらべあ基金と協同で、再生可能エネルギーの普及活動と環境教育に取り組んできた。それが「そらべあ発電所」と名付けられた太陽光発電設備（ソーラーパネル）を各地の幼稚園、保育園に贈る活動だ。各園では寄贈の際に、児童向けに環境問題をテーマにした人形劇や紙芝居などを行っている。

そらべあ発電所の設置はもともと、そらべあ基金が2008年4月に設立されて以来、継続している「そらべあスマイルプロジェクト」で、企業や団体、個人からの寄付により、ソーラーパネルの設置を希望する園を公募して選考（当初は抽選）し、1年に10基程度を寄贈。その総数は今年度末までに計31基となる予定だ。

ソニー損保は、このプロジェクトの法人サポーターの1社で、「幼稚園にソーラー発電所を☆プログラム」と銘打った独自の寄付活動で支援。自動車保険の契約者が契約を継続する際に、前年の実走行距離が予想年間走行距離を下回った場合、車の運転によるCO₂（二酸化炭素）の排出量が予定より減って環境保全に貢献したととらえ、走らなかった距離100kmにつき1円を収益からそらべあ基金に寄付し、そらべあ基金を通じて幼稚園、保育園にソーラーパネルを設置するという仕組みだ。

そらべあ発電所31基のうちソニー損保が支援したのは2009年12月の創造の森保育園（栃木県那須塩原市）を第1号に計8基。このうち3基は、岩手、宮城、福島の被災3県から希望する園を募り、環



境活動や環境教育の実績と今後の計画をそらべあ基金が審査したうえで2月に寄贈された。

そらべあ そらべあ基金のキャラクターで、ホッキョクグマの兄弟。体の小さいほうが弟の「そら」、大きいほうが兄の「べあ」。地球温暖化により北極の氷が解けて割れ、母親と離ればなれになってしまい泣いている。人には温暖化を防ぐために何をすればよいかを考え、行動に移すことが必要とのメッセージが込められている。

ecology.sonysonpo.co.jp
www.solarbear.jp
www.ioca.jp